

翁・嫗の文学と芸能

—— 森 正 人 ——

I 嘆老の歌—老いはやって来る

人が生きてゆくかぎり、老いを避けることはできません。それは必ず迎えなければならないものです。今「老いを迎える」という言い方をしましたが、老いはやって来るものなののでしょうか。たしかに古くからそのように考えられているようです。たとえば、

老いらくの来むと知りせば門さしてなしと答へて会はずらましを（古今和歌集 卷十七 雑歌上）

老いというものがやって来るものだともし知っていたら、門を閉ざして留守だと言って会わなかったのにというわけです。人が若いうちは、我が身が老いを迎えることになるとは思ひもしない、しかし生きていくかぎりいつかは必ず迎えなければならない、老いというものはそれを迎えたときに初めてわかる、そういうほろ苦い気分が微笑をともなって詠まれています。

しかし、いつもこのように老いを人ごとのようにやり過ごすわけにはいきません。やはり辛く寂しく侘しく悲しいものとして直面しなければなりません。

若い頃「翁の発生」という画期的な論文を書いた折口信夫（釈超空）は、晩年に次のような歌を詠みました。「遺稿」として全集に収められています。

いまははた 老いかがりて 誰よりもかれよりも 低き しわぶきをす
る

かくひとり老いかがりて ひとのみな憎む日はやく 到りけるかも
折口は國學院大学、慶應義塾大学の教授を務め、常に多くの教え子たちの敬愛を集めていました。しかし、若い弟子たちに囲まれているゆえに、我が身の老いがいっそう痛切に思い知らされるのです。作者の孤独、寂寥が側々と迫って

きます。

このようにしてやって来る老いとは何か、古人は老いをどのように受け止めたか、文学や芸能の世界を通して考えてみましょう。

II みずはくむ檜垣の姫

熊本市の西郊、白川のほとりに蓮台寺という寺があります。檜垣の姫ゆかりの地で、境内には姫の墓とされる古い石塔があつて、観音堂には檜垣の姫の像も安置されています。この像は、これまた檜垣の姫の伝説の残る金峰山の西の山腹にある雲巖寺（岩戸観音）の窟から発見された像といわれるものの模作です。発見の次第は橋南谿の紀行文『西遊記』巻一に記されていますが、五百羅漢の作られた天明三（1783）年のことで、像の入っていた石箱の蓋には姫の自作と彫りつけてあつたといひます。残念なことに岩戸から出現したもとの像の行方は知れません。

その檜垣の姫は、すでに平安時代の中頃から伝説的人物であつたようです。

筑紫の白川といふ所に住み侍りけるに、大弐藤原興範の朝臣のまかり
渡るついでに水たべむとてうち寄りて、乞ひ侍りければ、水を持って出
でてよみ侍りける

ひがきの姫

年ふれば我が黒髪も白川のみづはくむまで老いにけるかな

かしこに、名高く事好む女になん侍ける（後撰和歌集 卷十七 雑三）
大意は、年月が経つたので、私の黒髪も白川の水のような白髪となつて、その白川の水を汲むほどに年老いてしまったことです。衰えた自分の姿が汲んだ水の面に映つたのでしょう。「水は汲む」と掛詞の「みづはくむ」という語はもう意味がよく分からなくなっていますが、普通「瑞歯ぐむ」すなわち老人になつてふたたび歯が生えたと解されています。ともかくはなはだしく年を取ることです。「老いにけるかな」という言葉には、艶やかな黒髪をはじめとする若さが決定的に失われてしまったことについて、深い感慨がこめられています。

これとほぼ同じようなことがらが『大和物語』一二六段と『檜垣姫集』に載つ

ています。ただし、『大和物語』には歌を詠む相手を小野好古、『檜垣姫集』には国の守（肥後の守で清原元輔ともみなされる）とし、歌句も少しずつ異なっています。どれが真実に近いかというよりは、この歌と物語が口頭で伝えられて、そのために人物関係や場所を異にするさまざまな語り方が生まれ、右の三種の文献資料はそれらを別々に拾い上げて文字化したという事情が考えられます。そもそも、この檜垣の姫は、『後撰和歌集』に「事好む女」とあるように遊女のような存在と見なされていたようですが、実像はよく分かりません。『檜垣姫集』からは九州各地での活動がたどられますが、載っている歌は一人の歌ではなさそうで、複数の人の歌が歌集にまとめられたふしがあります。

熊本に檜垣の姫の伝説が定着するについては、能「檜垣」の果たした役割が大きかったと見なされます。先の岩戸観音から姫像が出現したとされたり、蓮台寺の境内のごく近くにある井戸で姫が水を汲んだと伝えられているのも能とかかわりがあります。「檜垣」は次のような曲です。

岩戸観音（雲巖寺）に毎日白川の水を汲んで捧げる老女がいる。寺の僧がなぜこのような苦勞を続けるのかと問うと、かつて「年ふれば我が黒髪も」の歌を詠んだ檜垣（その亡霊）と名乗り、弔って欲しいと頼んで姿を消す。以上が前場。僧が白川のほとりの庵に行くと、先の老女が現れて、白拍子であった生前舞の誉れ高く、その罪のために死後苦しみを受けていると語り、白川の水を汲むなら罪も軽くなるかと水を汲み、舞を舞い、救済を訴える（檜垣の姫の成仏で結ぶ流派もある）。

この能で興味深いのは、「水に映る面影、老衰影沈んで、緑に見えし黒髪は、土水の塵芥、変はりける、身の有様ぞ悲しき」と、老女が自分の衰えた姿を水に映して悲しむ場面のあることです。水鏡の趣向は能「野守」にもあります。「野守」は、昔の天皇の代に、姿の見えなくなった鷹狩りの鷹を、野守（野の番人）が水たまりに映った影によって見つけ出したという故事を素材にしたもので、今は年老いた野守が若かった日のこのできごとを回想して、「げにも野守の水鏡、影を映していとどなほ、老いの波は真清水のあはれげに見しまもの、昔の我ぞ恋しき」と、衰えた姿を映して恥じ、昔の自分をなつかしむ場面があ

ります。

Ⅲ 水鏡が映すもの

老人の姿が水鏡に映る趣向は平安時代から一つの類型となっています。

枇杷殿の御絵に、岩井におんなの水汲む、さしのぞきつつ影見る
年をへてすめる泉に影見ればみづはくむまで老いにけるかな（源重之集）

花山院にて三首／翁、水汲むところ

底ひなき岩井の清水君が世にいくたびみづはくむとすらむ（大江嘉言集）

〔藤原道長の御堂造営に際して〕池掘る翁のあやしき影の映るを見て、

曇りなき鏡と磨く池の面に映れる影の恥づかしきかな

（栄花物語「音楽」）

水を汲む翁や姫の姿は、水鏡に衰えた容姿が映ってしまうことのでどこか滑稽を帯びた悲哀と、「みづはくむ」という言葉の不思議な響きに対する関心とから、このようにしばしば絵にも描かれ歌にも詠まれていました。

ただし、老人が水を汲み、その時彼らの姿が水鏡に映ってしまうのを痛ましく哀れなこととして、あるいは滑稽なこととしてのみ受け取るのは表層的に過ぎます。ここで、『大江嘉言集』の歌を注意深く読んでみましょう。翁が汲んでいる清水は底が深いので、汲み尽くすことはない、その水汲むわざを、世を治めている君の代に続けてきた、そしてこれからも幾度繰り返すことになるのだろうか、というのです。つまりこの翁は自らの老いをめでたい長寿に転換させて、天皇の治世の長いこと、それがこれからもなお続くであろうことを祝福しているのです。

しかも、老いを嘆く歌は、高貴な人の傍らで詠まれていることに気づきます。「野守」では、鷹狩りが盛んであったいにしえの天皇の代が讃えられますし、『栄花物語』の翁も、道長の繁栄をことほぐために登場しているのではないのでしょうか。檜垣の姫の場合も、老いを嘆く言葉の裏に長寿の喜びをこめながら、高貴な都人を歓待し祝福するために水を捧げるのだと考えられます。そして、捧げる水は、養老の伝説のように若返りの水、長寿をもたらす水ではなかった

でしょうか。水には生命を更新させる不思議な力があると考えられていました。そしてそれは鏡の神秘とも関係があります。

IV 鏡を見る翁一大鏡など

水鏡ではありませんが、鏡と関連づけられて語り手の老人が登場する作品があります。歴史物語『大鏡』の大宅世継と夏山繁樹です。二人はそれぞれ百九十歳、百八十歳という超人的な高齢を保っていて、彼らが見聞したできごとを語り、それをある人が筆記してできあがったのが『大鏡』であるというわけです。繁樹は、

明らけき鏡にあへば過ぎにしも今行く末のことも見えけり

と世継の翁を澄んで明るい鏡と讃え、また、

あかく磨ける鏡に向かひて我が身の顔を見るに、かつは影恥づかしく、またいと珍しきにも見たまへりや。

と戯れてみせます。もちろん、繁樹はここで実際に鏡を覗きこんでいるわけではありません。世継のみごとな語りぶりに比べて、自分は到底及ばないと恥じいって見せたのです。ここにいう鏡は、唐の太宗の政治論を編纂した『貞観政要』巻二の「人を以て鏡となす」というような中国的（道教的、儒教的）な観念と結びついています。鏡は、直接は見ることのできない自分の姿を映して自己の至らないところを自覚する道具であり、普通の人の目では知ることのできない真実を照らしたすものでした。したがってそれは規範や歴史であり、理知や道の象徴でもありました。中国古代の鏡には、裏に仙人や神獣の文様のほか、一例を挙げれば「買者長宜子孫、買者延寿萬年」（後漢時代）など、鏡を購入所持する者の長寿や繁栄を祝福するめでたい文字が表されていたのでした。それは日本も同じで、たとえば、

鏡鑄させ侍りける裏に鶴の形を鑄付けさせ侍りて 伊勢

千年とも何か祈らんうらにすむ田鶴のうへをぞ見るべかりける（拾遺和歌集 巻五 賀）

歌の意は、千年の命がありますようになどと祈る必要があろうか、鏡のうら

（裏、浦）にすむ（棲、澄）鶴の姿すなわち表の鏡面を見れば十分なのであった。このように、鏡というものは、また鏡を見ることはめでたい長寿を意味していたのです。『大鏡』でも、繁樹が世継の翁を讃える言葉に続けて、「さらに翁（繁樹）今十、二十年の命は延びぬる心地し侍り」と語っていました。

この『大鏡』を受けて、歴史物語が次々に書かれます。それらは、いずれも同じように高齢の老人がその見聞したところを語るという設定を持ち、『今鏡』『水鏡』『増鏡』と鏡という語を題に含んでいて、長寿—歴史—鏡と三つの観念の結びつきの強かったことが知られます。

先に、姿の見えなくなった鷹を水鏡によって見つけ出したという故事を取り込んでいる能「野守」にふれました。水鏡の趣向は至って単純素朴なものに見えますが、鏡とりわけ水鏡を覗き込むことは、肉眼に見えぬなにものかを見ることだったようです。たとえば、『古今著聞集』巻第七「術道」には、藤原伊通がまだ位の低い頃、井戸の底を覗き込むと水面に大臣の相が映り、将来自分が大臣になるであろうと知ったという説話が載っています。『平治物語』には、藤原通憲（信西入道）が鬢を整えようと盥の水に顔を映すと剣難の相が見えたと書かれています。この相の通りに信西は平治の乱で刃にかかって死んでしまいます。鏡には、過去を照らすばかりでなく未来を予言する神秘的な力がありました。『大鏡』で、繁樹が「過ぎにしも今行く末のことも見えけり」と歌に詠んだ通りです。歴史物語の語り手となる翁や姫が鏡の名で呼ばれることは、彼らが広い知識と深い知恵をそなえていることのあらわれです。

V 化身としての翁

『水鏡』は『大鏡』より後に作られましたが、『大鏡』の扱った時代より前の時代の歴史を語っています。そのため、語り手の設定には特別の工夫が必要でした。まず、長谷寺に参詣した老尼が三十四、五歳の修行者と同座します。修行者はかつて葛城山中で「翁の姿したる」「仙人」と出会ったことがあり、その仙人の見聞したところを聞き伝えて、老尼に語って聞かせるのです。鎌倉時代以降になりますと、超人間的な存在が語り手となる作品が多く生まれます。

たとえば、次のように始まる『和歌知願集』という『伊勢物語』の注釈書があります。

住吉に詣でて籠もり侍りしほどに……かの釣殿に、あやしき翁一人ゐたり。……今は百歳にも満ちぬらむかとおぼゆるが、髭、髪白みわたりたるが、白き水干の古びてあかみはてたるに、……この翁、古き代の物語曇りなく語りゐたれば、清き鏡に向かひたる心地して……神の心ゆるぎて、宮の内より形現じ給へるにやと

このようにして登場した翁が和歌の秘伝を語るのです。外見は卑しいけれどもどこか威厳をそなえた翁が、豊かな知識や深遠な知恵を披露するのは大鏡と趣を同じくしています。「清き鏡」とか「曇りなく語り」とかいう表現から『大鏡』の影響は疑えませんが、この場合は翁が住吉の神と設定されているのが中世的な特徴のあらわれといえます。

翁はしばしば神仏の化身なのです。もう少しそのような例を挙げてみましょう。

『今昔物語集』巻第十六には観音菩薩の靈験譚が集成されています。そのなかから二つの説話を挙げてみます。

高麗の国に遣わされた日本の僧が戦乱に遇って逃げるとき、河を渡ろうとするが、河は深い。観音に祈って救いを求めると、舟に乗った翁が渡してくれた。(第1)

越前敦賀に良縁に恵まれない一人の女がいた。両親は娘の幸いを願って家の後ろに堂を建てて観音像を安置し、まもなく相次いで亡くなった。女は親の財産を使い果たし使用人もいなくなって、ついには日々の食にもこと欠くようになった。女は観音に救いを求める。すると、夢に「老いたる僧」が現れて、夫となるべき者を遣わそうという。女はこれを信じて待ち、豊かで地位ある男と幸せな結婚をした。(第7)

観音が衆生を救うとき、あるいは夢のなかに現れて信者に指針を与えるとき、このように翁や老僧の姿をとることが多いのです。

これは日本の観音靈験譚の特徴で、日本人は観音という仏教の菩薩の背後に

古来の日本の神を見えています。というのも、観音を本尊とする寺院は、縁起譚として、昔からそこを領有していた神が仏教に土地を譲るといった類型的な伝承を持っているからです。たとえば石山寺の創始は、寺院を建立すべきすぐれた地を求めていた良弁という僧に、岩の上で釣りをしていた翁（比良明神）がその岩を観音に縁ある場所と教えたとされています。清水寺の縁起にも同じ趣の由来譚がありますし、金峰山の雲巖寺にも、翁ではありませんが池の主（法螺貝）が仏教に土地を提供したと伝えられています。固有の神はこのように新しい宗教に座を譲るのですが、古い神はそこを立ち去るわけでもなく滅びるわけでもありません。仏菩薩の背後に、あるいは人々の心の底に静かに息づいています。それが信者の夢の中や靈験譚にちらりと姿を見せるのです。

古代中世は、神聖なものが姿を現すとき、しばしば翁の姿をとり、あるいは翁に神聖な存在の面影を見ることのできた時代でした。

Ⅵ 浦島の結末

翁や姫は神聖なものの化身でありました。『大鏡』の語り手が「老いたるはかしこきものに侍り」（「かしこき」は「優れていて威厳がある」という意）と言うとおりですが、老人自身がことさらこのように口にしなければならぬ現実もあったのです。老いの尊さと厭わしさ、人の思いはその間で揺れます。

ここで浦島太郎の話を取り上げることにしましょう。蓬莱（あるいは常世ないし龍宮）の神女（あるいは乙姫）から贈られた玉手箱を開けると、中から白い煙が立ちのぼって太郎はたちまちお爺さんという結末は誰もが知っています。浦島の伝承は八世紀の古い文献に登場して以来、物語の基本的な枠組みは変わっていませんが、その解釈は時代によって違いがあります。

たとえば、『丹後国風土記』で主人公は蓬莱の神女と会えなくなったことを嘆き悲しみます。『万葉集』巻九の長歌では主人公は死んでしまうという悲劇的な結末になっていて、反歌では、

常世辺に住むべきものを劔太刀己が心から鈍（おそ）やこの君
と、常世に住んで永遠の寿命を手に入れられたはずなのに、戒めを守らずに箱

を開けた浦島の心の愚かさが笑われ非難されています。ところが、漢文で書かれた平安時代の浦島伝では不老長寿の仙人となったとされています。また、宇良神社蔵の南北朝時代の絵巻では、主人公が杉のうつほで老人となり、その杉の前にやがて祠が造られ、そこで賑やかな祭礼が行われるというふうに展開します。浦島は神になったというわけです。これより少し時代の下る御伽草子の『浦島太郎』では、太郎は鶴になって乙姫の亀と結婚し、最後には浦島の明神として祀られます。

浦島でなくとも、人は必ず玉手箱を明けてしまうでしょう。その結末は悲劇でしょうか、めでたいのでしょうか。この物語が何百年も伝えられてきた理由は、人間が人間であるかぎり誰もが玉手箱を開けるほかないという普遍性と、その結末の受け止め方の多様性にありました。したがって、浦島の結末をどのように解釈しどのように語るのか、それは現代の私たちの課題でもあるのです。

〔参考文献〕

折口信夫「翁の発生」（『折口信夫全集 第二巻』中央公論社）

山折哲雄『神から翁へ』（1984年 青土社）

黒田日出男『境界の中世 象徴の中世』（1986年 東京大学出版会）

鎌田東二『翁童論』（1988年 新曜社）

『日本の美学 【特集】 老い』22号（1994年12月 ペリかん社）